
俺が、俺たちが海軍長官だ！

rahotu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が、俺たちが海軍長官だ！

【Nコード】

N4834Y

【作者名】

rahotu

【あらすじ】

皇暦2598年 中帝国領土満州宙域に侵攻した日本帝国艦隊は裏切りにより一方的な敗北を喫した。

そして新たに任命される海軍長官、高野。

原作とは又違った大帝国の物語が今始まる。

ザ・オープニング（前書き）

前作の終わり方、書き方が作者のほうでも納得がいかなかったのも、また新しく書き直してあげました。

基本日本軍サイド中心で進んでいきますが、

ザ・オープニング

統一宇宙暦938年

北京星域満州近海

折から続く中帝国と日本帝国との長年にわたる戦争は、大小十六回の中断と講和を挟みつつ遂に日本海が長引く戦争を終わらせようと遂に賭けにでた。

最新鋭の戦艦八隻、巡洋艦十六隻、駆逐艦三十八隻に加え、旧来からの艦艇を加え延べ九十隻以上もの艦隊が一路中帝国首都北京を目指し進んでいく。

対する中帝国は針路上の航路に旧式艦体を僅かに六十。

精強で知られる日本軍にとって、駆逐艦一個戦隊でも十分に殲滅できる相手である。

日本海軍第二艦隊旗艦伊勢艦橋では、レーダー上に映る中帝国の艦隊を監視しつつ航空母艦から艦載機の発艦を急がせていた。

「急げ！！もう敵が直そこまで来ているぞ。爆装した機体から甲板にあげるんだ」

「十四番ケーブルを収容急げ。パイロットは緊急救命装置が安全に稼動するかどうか・・・」

「整備班、なにやってんの！！レーザー機銃のスコープがコンマ2

ずれてるぞ」

さながら戦場のような喧騒のなか、その男はいた。

日に焼けた浅黒い肌。

堀の深い目鼻立ちに、すっとした眉毛が男の顔の造詣に艶を与え。

分厚い唇に閉じられた瞳にすやすやと居眠りをこく優しい息遣いが、この男の外見的特長からいって想像できないほど穏やかである。

男の名は高野五十六

日本海軍では珍しい年功序列ではなく実力で提督まで成りおおせた一代の雄である。

この男、出撃前の忙しい格納庫の中でのうのうとベンチに横たわり、居眠りをしている姿を見るに。

到底、そのよんな男には見えないが、しかしこの男の凄い所はこれが彼なりの精神統一の一種だと言うことだ。

勝敗は兵家の常であり、驕れる者久しからず、夏草や兵共が夢のあと。

戦場とは無常でありたとえ一時の勝利を得たとしてもやがて夏草のある苔がむした髑髏のようなもので、この男の価値観から言って戦闘を前に気張る將軍などではなく。

常に無為自然とし、戦場であっても自らを律するのではなく委ねる。

書くとは難しそうだが、用は『戦いを前にして士気を鼓舞するようではいけない。嘗て関の声一回にして兵気力士気とも充満し二階にして気力衰え三回目にして士気も萎える。將軍たるものは兵を鼓舞するのではなく如何に超然とした態度で戦場を俯瞰し、ここぞと言う時のみ えいっ！！』と声をあげ自ら先頭に立って戦う胆力を持たねばならぬ』

それとハンガーのベンチで寝ているのどう関係があるか分からないが、だがこの行動はこの男なりの考えあつてのこと。

徒に余人が考えても仕方がないというかなんというか・・・。

整備用のオイルと火照って散る汗の臭いとが混ざり合った格納庫を高野は好きだった。

森の中で横たわり、そこで嗅ぐ草木の臭いと同じように高野にとって出撃前の格納庫の臭いは自然と心を和ませる一種の清涼剤であり。戦いを前にして猛己の心を落ち着かせる為であった。

高野がベンチに横になっていると、向こうから若い海軍士官が走ってくる。

高野の前で立ち止まり、見事の敬礼をしたその士官は。

「高野提督、そろそろ戦域に入りますので艦橋の方にあがってください」

その声で起きた高野は、目を開けジロリと思わず若い士官を睨んで

しまう。

提督に睨まれ何か粗相をしてしまったのかと思いきつく若い士官の姿に、高野は心の中で「また」思ってしまった。

寝起きの高野はそれほど機嫌が悪くはないのだが、つい目付きが悪くなってしまう。

こればかりはどうしようもないのだが、オロオロする士官は何も悪くは無いので高野としてはどうしたものかと考えこんでしまった。

「あの・・・提督、何処かお加減が悪いので？」

勇気を振り絞って何とか声をかける仕官に、私ははたと戦闘前だと言ふ事を思い出す。

「いや、なんでもない。直に艦橋に上がると伝えてくれ」

「はっ了解いたしました」

むっくり、とベンチから起き上がった高野は凝り固まった体の間接を解しつつ艦橋へと上がる為エレベーターの方に歩いていった。

最悪だ、今高野の目の前に広がる光景は目を覆いたくなるような惨状を映している。

栄えある大日本帝国帝国海軍の提督があらうこと中帝国と繋がり海戦中に裏切るなど、誰が予想できよう？

しかも同時に二名の提督が裏切ったのだ。

高野は普段の超然とした心を忘れ、怒りをあらわにして命じる。

「目標桶口艦隊および末山艦隊主砲発射用意」

「高野提督！？それは．．」

「今更味方殺しも糞もあるまい。裏切り者の乗艦に攻撃を集中。赤城と蒼竜、雲竜から雷撃隊を出撃、中帝国艦隊を足止めしろ」

高野提督の怒号に、思わず命令に従ってしまった参謀以下艦橋士官らは戸惑う味方を尻目に裏切り者を肅正する為に攻撃を開始した。

高野艦隊戦艦二隻重巡洋艦六隻からの砲撃が桶口および末山艦隊の側面を舐める。

「ど、同士桶口。高野艦隊が攻撃を仕掛けてくるぞ」

高野艦隊からの正確な砲撃が旗艦すれすれを掠めるなか脂汗を流し

た末山提督は同じく裏切り者である桶口提督に通信をつなぐ。

「あ、慌てるな同士末山。このまま中帝国艦隊の方に逃げればよいではないか。なに、既に前倉長官の旗艦は満身創痍だ。後の処理は中帝国に任せればよい」

「おおそうだな同士桶口。では早速逃げると．．．あぎゃあああああ！！」

だが、末山提督は最後の言葉を発することなく、悲鳴をあげながら通信が途切れる。

運悪く？高野艦隊の執拗な砲撃がついに末山の乗艦を捉え、戦艦金剛の主砲の直撃をエンジン部に受けた為一瞬で閃光と共に宇宙の塵へと化してしまった。

「どうした、同士末山、末山。ま、まさかやられたのか！？こうしてはおれん。機関全速中帝国艦隊と合流する」

桶口提督は末山提督の最後を悟り臆病風に吹かれたように全速で戦場から離脱していった。

だが、やっこの思い出中帝国艦隊と合流した時彼らは出迎えに来たはずの中帝国の艦隊の姿に絶句する。

高野提督が放った長槍は見事中帝国艦隊を粉碎し、碌な対空火器など揃っていなかった中帝国艦隊は一方的に雷撃の被害を蒙り、旗艦までも艦橋に被弾し提督以下艦隊首脳部が全滅。

残存艦隊を臨時に指揮を取っていた砲雷長に危うく撃たれそうにも

なり桶口以下裏切り者達は生きた心地がしなかった。

命からがら高野の猛攻から逃げ延びた桶口達はしかし中帝国でも気を許すわけにはいかなかった。

まあ、さっきまで自分達を攻撃していた奴等と一緒になのだから致し方あるまいが、それでも当初の予定よりも大幅に変更を余儀なくされた桶口提督はこんな時に末山が居たらと一人寂しく泣くのであった。

無論同情や憐憫の気持ちからではない。

唯単に責任や非難をおっ被せて被害を少なくしようとしただけなのだから。

日本帝国御所

満州会戦での敗北により帝国海軍前倉長官は重傷を負い最新鋭の戦艦を含む実に三割の兵力をたった一度の会戦で永久に失ってしまったのだ。

高野は裏切り者を粛清した後、自軍の不利を悟り残存艦隊をまとめ日本へと撤退。

そして現在高野は日本にやっとの思いで帰還したが、直に艦隊本部に呼び出され帝に拝謁する為に御所まで来ていた。

「高野提督、此度はそちの活躍で大勢の兵士たちが無事に生きて帰ってくれました。兵士達に替わりまず感謝の言葉を受け取ってください。本当にありがとうございました」

帝

日本建国の折から日本の守り神である柴神に選ばれた超常の能力を持つ女性達のことを指して日本では帝と言ひ国の最高指導者として崇め奉っている。

今代の帝は二年前に帝に選ばれたばかりだが、容姿は女性にしては長身で恐らく169cm位だろうか。

スツとした目鼻立ちに、強い意志を秘めた黒い瞳。

ビロードの様に艶のある美しく長い髪を頭の後ろで結い余った部分を紅いリボンでまとめて背中に垂らしていた。

（公式の帝ちゃんの没絵参照）

緋色の日本服を下に着て、その上に重なる帝のみが着る事を許された衣、紫の衣に袖を通し一国の指導者に相応しい風格と威厳とを併せ持つ傍ら、まだ二十歳にもならない少女の面影を何処となく残していた。

「いえ、非常時とはいえ勝手に指揮を取ってしまったこと弁解も御座いせん。すべては私の独断^{わたくし}に御座います、処罰は全て私目にどうか部下たちには寛大なご処置を」

高野は両膝を床につけ深く帝に向かって頭^{こうべ}を垂れた。

軍とは完全な縦割り社会であり信賞必罰は絶対である。

高野は自分よりも上位の者が板のにも拘らず、勝手に戦列を離れ独断で戦闘を行いあろうことか味方殺し（裏切り者の肅清とも言う）をやったのだ。

普通ならば軍事裁判にかけられよくて終身刑、最悪極刑も免れえぬ重罪であった。

クスリ

ふと花のような少女の笑う声が聞こえた。

躊躇いながら少しだけ目を上に向けると帝がまるで珍しいものを見るように口元を手で覆い隠していたが何分目が笑っていて今にも笑いこけそうであった。

「帝様、御前ですぞ」

爺や役の外務宇垣桜長官が憤然とした態度で帝を諫めるが、それが更に壺に嵌ったのかとうとう帝は噴出してしまう。

何がなにやら分からないことだらけだが、どうやら帝は私を罰する気はないようだ。

一頻り笑った後、帝は先程のキリッとした居住まいを崩し年相応の少女が浮かべるようなどんなことをいったら相手を困らせる事が出来るのだろうか。

と考えてる顔になって言った。

「高野提督、軍規によれば確かに貴方を処罰しなければなりません。ですが貴方のお陰で實際助かった者達が大勢いるのです」

帝は彼女の世話役の女官長ハルに重箱を渡し、それを高野の前に持ってきて置いた後ハルは恭しく礼をしてから静かに又帝のそばに戻った。

不思議に思い帝の顔を見るが、その顔は悪戯が成功するのが待ち遠しい子供の顔をしていた。

促されるままに重箱の蓋を開けると何と突然白い煙が出てきて箱の中身を見ようとしていた私の顔を直撃した。

あら不思議、なんと高野がヤング高野になってしまいました。

といった展開は無いのであしからず。

普通に手紙の束が入っていただけだ、それも尋常じゃないほどの。

「それ全部貴方の恩赦や特赦を求める手紙です、他にも生き残った兵士達の家族が署名活動をして私に送ってきてくれました。それに私自身貴方のことをできるならば助けたいと思っていましたから」

「帝様・・・」

「そんな顔をしないで下さい。高野、日本帝国臣民は皆例外なく我子のようなもの。子が死んで喜ぶ親など居るはずがありません」

帝はそう言って高野を諭すが、しかし子が死んで喜ぶ親のところで帝の顔が曇るのを高野は確かに見た。

「よって貴方の処罰を無しとし、替わりと言ってはなんですが今回の功を帳消しにしてと付きますが良かったですね高野。貴方には貴方を慕う大勢の人々が居ることを知る事が出来て」

高野は自分の心が温かい気持ちでいっぱいになるのを感じた。

そして、改めて帝の対する忠誠と日本という国に対する愛国心を高めていった。

維新会

高野五十六

この男には人に知られたくないある秘密がある。

御所で帝と拝謁し、その帰りに彼は市街にある居酒屋へと寄っていた。

本来高野のような高給取りである軍人が来る様な所ではない小汚い、しかし仕事を終えたサラリーマンやOL等が仕事の鬱憤を晴らしこの場所では如何なる無礼講も許される、そんな賑やかな場所だ。

店の店主と昔からの顔馴染みで、士官学校を抜け出してはよくここで仲間と共に酒盛りをしたり、上官の悪口を言ったりなど高野にとってもこの場所は大切な思い出の場所でもある。

お銚子を二本に簡単な摘みを二、三品。

それとご飯にナスと梅の漬物が添えられただけの簡単な料理に舌鼓を打ちつつ高野は一人個室で酒を飲んでいた。

同じ頃、市外市内の屋台や居酒屋果ては土木工事の現場で同時に休憩に入った者達が頭の米神に少し手を当てた時、それは始まった。

『では、これより維新会会議を始めたいと思います』

頭の中で響く声、何重ものプロテクトとジャミングを通しての超高速光子リアル電脳通信の世界から各々の休息や或いは仕事に手をつ

けていた者達に同時に声が届く。

彼らは自分達を維新会と呼ぶ丁度エイリス帝国がワープ航法を発見したと時を同じくして日本に生まれたある種の政治結社であった。

その力はこの千年近くの間世界中にくまなく根を張る特殊諜報機関東機関や副組織紺碧会、蒼海会などの諜報組織。

光井、南波重工など日本の政治産業芸能マスコミ界全てに裏から歴然たる影響力を誇る影の組織だ。

彼等の思想は唯一つ。

この世界の真実と日本の繁栄のみであり、その為にはあらゆる努力や工作犠牲を払ってきた影の功労者でもある。

事実彼等のお陰で高野が提唱する航空艦隊第一主義は日本海軍艦隊本部に認められ大型空母二隻を含む空母六隻が現在建造中であり、その他にも第一次及び世界恐慌において壮大な国家を凌ぐ資金力を持って壮大なマネーゲームを仕掛け。

エイリス、ドクツ、ガメリカ、ソビエト、オフランス、ポツポーランドから莫大な富を収奪する等その力は最早日本という国を越え世界規模での国際組織力を持ち尚且つスーパースパイ赤石大佐にも実体を掴ませない等その力はメンバーである高野ですら時々恐ろしく為るほどだ。

『まずは先の満州海戦での日本海軍の敗北についてですが、想定より遥かに被害が少なくすみました』

『それについては高野君の手腕が大きく影響しているだろう。彼を引き込んでおいて良かったよ』

『しかしまさか二人同時に裏切るとは、これは想定外でしたよ。実際何かしら仕掛けてくるとは分かっていたましたが、まさか戦闘直後に裏切るなど』

『それは致し方ありません。東機関や紺碧会、蒼海会はガメラ、エイリス、ドクツ、ソビエトに散っていますから国内諜報力の低下は否めません。寧ろこのような事こそ明石大佐の分野では？』

『伊賀甲賀風魔の三流派を修めたスーパー忍者でも主君の命令が無ければ動かないとは。いやはやもう少し融通というものを聞かせてもいいものを。今回の失態を盾に諜報部に食い込むことは出来ませんか？』

『今でさえ綱渡りなのだから、これ以上の浸透は我々の姿が明るみに出てしまう。そうなれば帝や各国首脳部それと若草会の連中が黙ってはいいだろう』

『だがいい事もある。当初の予定であった裏切り者の存在を盾に現海軍首脳部を解任に追いやり我等の同士を海軍長官に置く言う案。存外上手く行きそうだぞ。女官に潜ませた草から早速情報が届いた。どうやら次の海軍長官が決まったそうだ』

『ほう、今の頭の固い連中にしては素早いな。それほど満州での敗北が効いたか、で次の海軍長官は誰だ？まさか平良の奴ではあるまいな』

『いや、そのために態々闘病生活を長引かせるよう工作しているの

だ。極端な愛国集団は政治の世界には不要だ』

『そのことで愛国獅子会の連中が五月蠅いだろうが、こちらで手を回しておく。』

『で一体誰なのだね次の海軍長官は？』

『それは高野君が知っていると思うが、どうなんだね。そろそろ白状したら』

『いえ、私は何も聞いておりませんが』

『？と為ると今日君が呼ばれたのは・・・』

『先の満州海戦での越権行為及び裏切り者の肅清に対する件です。その様子ですとどうやら私と皆様とでは情報が上手く噛み合わないようですな』

『隠していてもしょうがない。次の海軍長官は高野君きみだよ』

『そうですか・・・』

『驚かないんだな高野君いや高野海軍長官と呼んだほうがいいのかな？』

『茶化さないで下さい。それにまだ受けるとは決まったわけではありません』

『だが受けるのだろうか？四長官を維新会から出すのは結成当初からの悲願でもある。君ならば誰もが納得するだろう』

『いえ、私は上に立つに足る資格は．．．』

『上に立つものに必要なのは資格でも名誉でもましてや血筋でもない。資質と運だ』

『運ですか．．．』

『そうだ、これで君も晴れて我ら維新会の正式なメンバーとなったのだ。君には確かに運が付いている、自信を持ちたまえ』

『そう言う事ならば．．．分かりましたこの話受けましょう』

『やってくれるか高野君!!』

『ですが最終的な決定を下すのは帝です。あの方の言葉一つで私の身などいとも容易くどうにでも為ってしまうでしょう』

『そうならないように、我等が居るのだ。これからは維新会が君を利用するのではなく君が維新会を使うのだ。これまでの手腕を期待しているぞ』

『では海軍長官の件は一先ずこれでいいでしょう。次は国内経済と対アメリカ、エイリス、ソビエトに対する備えですが．．．』

こうして今日も維新会の夜は更けていく。

誰しもが明日の日本を信じそのために様々な策謀を巡らせながら、今宵の夜風は一体どこに飛んでいくのだろう。

日本帝国御所内

夜半遅く帝の自室で蠟燭のほのかな明かりが照らす中紙を捲る音が聞こえる。

帝は高野との謁見が済んだ後直に他の三長官を招集し御前会議を開いた。

議題は勿論次の海軍長官を誰にするか。

まず年功序列で言えば山本無限提督なのだが、持病故既に退役中の

身。

平良少将も若いながら能力は十分だか長引く闘病生活中で軍務には耐えられないと判断されはて困ったことになったと頭を悩ませていた時ふと高野の顔が帝の脳裏に浮かんだ。

帝は急ぎ高野のついて詳細な情報を集めさせ能力人望共に問題ないと判断され満場一致で次の海軍長官に高野を押す事が決まったのだが。

帝はどうしても釈然としない気持ちになっていた。

だからこうして夜一人で本当にこの判断でいいのか。

間違っていないのかと頭を悩ませていたのだが、経歴から様々なことと明石大佐を動かして背後関係を洗ってみても何も黒いところなど出てこなかった。

だからこそ帝は高野に対して疑念を抱かずにはいられない。

生まれてから人を疑わねば生きてこれなかった、人を信じられなかい生き方をしてきた彼女には、何ら後ろめたい事がない高野を本心から信用する事が出来ないのだ。

帝としてこの考えはいけないと思っても、どうしても心の中で渦巻く疑念は消え去る事が出来ない。

悶々として腕に顔を埋めた帝はそのまま悩みに悩み結果、何か問題があった時に備え後任を今の段階で選ぶということを決めるに留まっただけであった。

こうして疑念と疑惑が渦巻く中高野は翌朝御所に再び呼び出されることになるのだが・・・

果たして帝は高野を心のそこから信頼できる日が来るのだろうか？

果たして日本の運命はどうなってしまうのだろうか？

全ては高野にかかっていた。

登場人物紹介（前書き）

まんまプロットのコピペですが、色々と人なんか出てくるのでここに乘せておきます。

登場人物紹介

キャラクター及び各陣営紹介

日本陣営

御前会議メンバー

高野五十六

この作品の主人公。無為自然と常に余裕を持った態度で何事にも臨み大局的見地からの状況判断に優れた戦略軍政家。維新会メンバーの一人。

帝

日本帝国の最高指導者。幼い頃人を疑わずして生きていけなかった為人の嘘を見抜くのが上手い。またその超常の力は歴代トップであり神風の儀式の成功率は100%を越え既に二度に渡り大怪獣富嶽の撃退のみならず手傷を負わせるほど。高野に対して疑惑を抱いている。没案のアダルト帝

宇垣桜

日本帝国外務長官。ガチガチの愛国主義者だがそれは人一倍帝に対する敬愛と日本に対する忠誠心の高さの裏返し。だが時々融通が効かない事もあり維新会メンバーからは石頭と渾名されている。帝を諫めるご老公の役割も自ら買って出ている。

山下利古里

陸軍長官。帝国四長官の紅一点、祖父に偉大な陸軍元帥が居た為親の七光りならぬ祖父の七光りでは無いと証明するため努力してきた才女。しかい一方で精神論者である面が目立ち客観的見地や現実を見据える高野とはソリがあわない一面も。

猫平

内務長官。殆どの御前会議を何かとつけて欠席している。実は帝から維新会の調査を依頼されておりそのため特別に御前会議に出なくともよい許可を貰っている。帝曰く猫のように丸っこくて可愛い人らしい？

女官長ハル

帝の身の回りの世話をする奉仕女官達の長。帝を敬愛し御身を守ることを第一にしている。目下新しく海軍長官になった高野の素行を監視中。

柴神

日本の守り神であり、歴代の帝を選び自分は政治にはかかわることは無くこの国と帝を見守り続けている存在。しかし日本の危機の際には自ら刀を持って立ち上がりその姿は神話や書物の中で語られている。

帝国海軍

維新会メンバー

その1

古くからの重鎮。凡そその正体を知るものは居ないが噂では伊藤閣下その人ではと噂されている。

その2

財閥の大物。一代で財を成した成金が三代目で遊び潰されたのを復活させ伸し上がった巨人。現在の閉鎖的な日本経済の実情を憂いている。

その3

飄々とした口調で物を言う運送業のトップに立つ男。彼の言葉は時に今の日本のあり方にすら鋭い指摘を入れる。

その4

犬である。維新会のマスコットで実は柴神の隠し子ならぬ隠し犬ではと専らのうわさである。

その5

退役した軍人会の取り纏め役。年寄りの冷や水、老婆心と自分でも思っているが最後まで国を良くしようと頑張るスーパーお爺ちゃん。

その6

東機関局長その人であり、主に大西洋宙域においての情報収集、諜

報活動を行っている

その7

旭日艦隊の司令官。通常は哨戒艦隊の指揮官をしているが恐らく日本で高野の次に戦上手な軍人。

その8

紺碧艦隊の司令。維新会の紅一点ながら政治地理学的見地から独自の戦術戦略を編出す女傑。隠密艦隊である紺碧艦隊を手足のように操る。

その9

某帝都大学の教授。世界でも有数の頭脳の持ち主であり私設武装組織である紺碧旭日両艦隊の装備兵器の開発も行っている。

その10

恐らく日本きっての大物政治家。古くから日本の陰陽共に活躍しこの国を支えてきた忠信家系の生まれである。維新会の存在を隠匿できたのも彼の協力あってこそ

その11

日本人ではなく元はガメラカ出身のメンバー。しかし日本に帰化し維新会メンバーとなる。主にハニートラップを中心とした諜報作戦で成果を上げている。

その12

現在は空席

その13

誰もその存在を知らない幻のメンバー。一説ではこの組織を作った創始者が座っているとも・・・。

ドクツ第三帝国

ガメラカ共和国

ガメラカ植民地

南米諸国

エイリス帝国

エイリス植民地

ソビエト連邦

中帝国

オフランス王国

イスパニア王国

その他

新海軍長官高野

一週間後高野は再び御所に呼び出され、帝から新しい帝国海軍長官に任命された。

数日中に華々しい式典と共に私は帝と共に居た。

帝の前に跪いた私は歴代長官が賜ってきた元帥刀と儀典官が仰々しく述べる勅を聞きながらこのような式典を古臭いと煩わしく思うのではなく、この式典の真の意味に気付いていた。

（帝様は政務用の服のまま。本来ならば儀式用の特別の設えもうけるのだが、恐らく戦時中ということもあり自重したのだろう）

（報道関係者が式典に招かれているのも気になる。この様子は日本全国に中継され繰り返し放送されるらしいがまるで自分が見世物のパンダか何かになったようだな）

そう頭の中で考えていた高野ではあったが不意に帝自らが自分の手を取り自然と立たせているのに気付いた。

そして手を取った時帝が耳元でそっと、

「バカバカしいとは思うかもしれませんが、ここは皆の顔を立ててください。それに折角の晴れの舞台なのですそのような顔つきでは今後のことを皆が不安がりますよ」

帝に言われて初めて自分の顔が懺然としていたことに気付き内心で笑ってしまう。

（無為自然を常としている自分がまさかこうまで感情を表すとは。外見から想像するよりも帝の能力は高く見たほうがいいな）

帝と新しい海軍長官が共に手を取って立つ姿は、瞬く間に日本国内のみならず銀河中を駆け巡る。

成程、してやられたは！！

高野は心の中で膝を叩いて感嘆した。

新しく任命された海軍長官の緊張を労うように見せて上手く私と自分の顔を売り込んだな。

今の帝は余り外に顔を見せないからこの機に纏めて見せようとしたのだ。

その為に今回の式典は正にピッタリであり、これでこの日本で私と帝の顔を知らぬものは居なくなった。

ますます唯の少女ではないな。

高野の内心の心が躍り上がるような感嘆を抑えつつも、そばに立つ帝が今どんな顔をしているのか、不思議と覗き込みたくなっていた。

華々しい式典から翌日。

全国に中継された放送で先の満州海戦敗北で気落ちしていた海軍は新しい長官を向かえ一氣に息を吹き返そうとしていた。

まず内部から裏切り者の存在を盾に旧主流派、年功序列で提督になった者達を軒並み更迭或いは閉職へと追いやり、これまでの艦隊決戦主義から航空機第一主義へと転換を図った。

同時に、内部調査で上がった国粹派、過激な愛国主義者や共有主義者などを放逐し軍内部の意思の統一を図ると共に維新会の息のかかった者達や実力があるのだが今まで冷遇されていたものを昇進させ極めて早く海軍の組織改革を成功させた。

こうして新生された帝国海軍を率い高野は因縁の地である満州に赴こうとしていた。

維新会会議

「では、海軍内部の組織改革はもう終わったと？随分と素早いな」

「元々改革の芽は何度か合ったのだが芽吹かなかったただけだ。高野君が余計な柵やなにやらを取り除いたからこそ此度の改革が成功し

ただ」

「いえ、私は特に何も。しかし意外と維新会のメンバーは広くいたのですね。巨大な組織だとは思っていましたがまさか末端の清掃員に至るまで構成員が居たとは・・・」

高野は軍改革の際自身で調べた或いは人事局に調べさせた情報と維新会からのデータを付き合せて組織改革の人員を練ったのだが、高野が目をつけたその殆どが維新会と何かしらの繋がりを持ち、逆に人事局が進めた人材は自身の調べと維新会からの情報で取るに足らない人物と判明し、改めて高野は自分が所属する組織の根の深さを実感した。

「今の近代的な軍創立から我々は実に様々なところで関わっている。今更こんなことでは驚いていられないぞ、高野君」

「それよりも軍内部の改革はいいとして満州開戦で失われた艦艇の補充をどうするかだが・・・いつそ旭日艦隊から何隻か出そうか？」

「いえそれには及びません。三割の損害とはいえ被害の奥は最初の奇襲と撤退戦時の例外的な損害だけで日本に帰還してから改めて修理不可能と判断されたのが二割で残りの一割は殆どが旧式艦ばかりです。それに前倉全長官は満州で動員した最新鋭艦隊はその四割しか動かして居らず日本国内に散った艦艇を召集すれば容易に補填できます」

「全く前倉さまさまだな。無論嫌味だが」

「なるほど遅くとも来週には再び攻勢に出る事が出来るか。高野君君は一体何処までを考えているかね」

「と言いますと?」

「中帝国を日本の領土にする気はあるかどうかと言う事だ。無論その気ならば我々は全力で支援しよう」

「.....」

「どうだね」

「私は、私は一軍人にしか過ぎません。帝の言葉が全てでありまたそれが日本の意思ならば従います。しかし・・・」

「しかし私個人としては日本は中帝国に深入りすべきではないと思います」

その言葉に満足した維新会メンバーは皆頷いて高野の言葉に賛成した。

あの星域に深入りすることの恐ろしさを、彼らは身をもって知っているのだ。

「しかし、日本がこれから生き延びる為には生活圏が必要です。最低でも満州宙域を取り日本は極東においてのバランスオブパワーを担うべきでしょう」

「それについてはいいさいない。だが、現在中帝国内部は皇帝の影で大きく二つに分かれている。新ガメラ派のリンファ提督、新ソビエト派のランファ提督。この二人は共に軍部を二分する勢力の筆頭だ」

「どちらにしても厄介ですな」

「それについては、私の紺碧艦隊に任せてもらいたい」

「？何か策があるのか」

「知っての通り、かの国は一枚岩ではありません。それを皇帝と四億年の歴史と言う実体のない虚構の存在で塗り固めているに過ぎません」

「成程な常に内戦の種を抱えているわけだ」

「ええ、後はそつと風をこちらから吹いてやればいいのです」

「だが火があまりにも強すぎると今度はこちらに火の粉がかかってくるぞ。そうなったらどうする？」

「それは全て列強が被ってくれますわ。租借地という最高の壁があるのです、各国は挙って軍を派遣し結果・・・」

「中帝国を舞台にパイの切り取り合戦、か。相変わらず悪辣だな、その方法だと我々には一切被害はでない」

「だが国内の連中がどう言うか分らんぞ。特に中帝国内戦を好機と見て深入りしそうな連中がでてくるやもしれん」

「軍部は私が抑えましょう。それに、その時はガメリカの存在を強調すれば思いとどまるはずです」

「成程な、高野君きみの考えが漸く分かったぞ。ガメリカを中帝国内戦に引きずりこませるつもりだろう」

「ならば彼等には頑張ってもらいませんと。だが中帝国の様に一つになるのは望ましくない」

「それは大丈夫だろう。ガメリカが出てくればエイリス、オフランスが黙ってはいまい」

「ガメリカは恐らくリンファの連中を支援し、ソビエトも影ながらに共有主義陣営を支援するだろう。エイリス、オフランスは自分達の植民地を切り取るのに忙しかろうに」

「そして、中帝国は世界を支配する列強の睨み合いとなる。私の紺碧艦隊はその裏で内戦を助長させるよう動きましよう。無論恨みは全てエイリスガメリカオフランスに」

「我日本は満州に籠っていればよい。さすればガメリカも日本に目を向ける暇すらあるまい」

「その事なのですが、どうやらガメリカはどうやら若草会の連中、こっちが尻尾を掴ませないから国ごと叩き潰そうということらしい」

「何と！？まことか」

「東機関蒼海会を動かして掴んだがどうやら若草会の連中、こっちが尻尾を掴ませないから国ごと叩き潰そうということらしい」

「相変わらず粗雑で乱暴な連中だ。所詮は開拓民あがりのカウボーイ、ロデオガールだな」

「だが対ガメラ力開戦は絶対に避けなければ成らぬ関門のはず。それを今更・・・」

「それについては、皆様に聞いていただきたい事が・・・」

高野は自分が長らく暖めてきた対ガメラ力開戦の策を告げた。

「うゝん」

「これは流石に・・・」

「いやしかし・・・」

「高野君、本等に是しかないのか？もっと別の方法があるんじゃないのかね」

「私が今ある情報と力を鑑みての結果です。無論もっと別の方法は無いわけでもありませんが、これが最終的に一番犠牲が少なくてすむのです」

「まあ、皆さん落ち着いて。ですが現状では高野君の策が一番犠牲が少くないようですし、今後維新会はガメラ力開戦に備えていこうではありませんか」

「兎に角、皆さんにはより一層の協力をして頂ければ。私としては十分なのです」

果たして高野の策とは一体？

日本の運命やいかに！

維新会メンバーとの会議を終え、高野は再び帝国海軍司令部で精力的に働いていた。

その超人的な働きぶりにより再編と訓練を終えた海軍は予定よりも早く日本を出撃。

高野長官自身が直接指揮を取るため帝国艦隊旗艦長門に乗り込み満州へと再び侵攻していった。

同時刻、中帝国北京艦隊はプサンを出航。

再び因縁の地である満州において両軍共に戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

その同じ場所で・・・

「トホホホ、一体全体如何してこうなった？」

第一次満州開戦で裏切った桶口提督は現在中帝国警備艦隊司令とし

て手土産に持ってきた自分の船を没収されあまつさえ中帝国でも特に廃艦間近の老朽艦だけで構成された船団の司令官にされていた。

中帝国のハニートラップに引っかけた日本を裏切ったのはいいのだが、これでは話が違うと訴えるもこの国のシュウ皇帝に青龍刀を首に当てられながら。

「朕はとても情け深いぞ。態々ソチに我国の艦隊を与え更に提督にも取り立ててやった。これ以上は一体命以外何を望む？」

と言われては引き下がるほか無い。

「クソ、それもこれもあの高野のせいだ。アイツさえいなければ……」

「何をぶつくさ言ってアルね？ さっさと仕事するよろし」

「はっはい分かりました」

こうして桶口は高野を逆恨みしながら中帝国に扱使われる日々を過ごすのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834y/>

俺が、俺たちが海軍長官だ！

2011年11月15日13時20分発行